

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	横須賀市における多職種が参加した在宅療養連携に関するエチケット集づくりの取り組み
演者名	大友宣 1)2)3)、川名理恵子 4)
所属	1) 社会福祉法人 日本医療伝道会 湘南国際村クリニック 2) 社会福祉法人 日本医療伝道会 衣笠病院 3) 横須賀市在宅療養連携会議 連携手法検討専門部会長 4) 横須賀市健康部地域医療推進課

【目的】高齢化が急速に進展した地域の一つである神奈川県横須賀市では、医療と介護の連携を推し進めていく必要がある。横須賀市では行政と各ステークホルダー代表が集まり、連携を図ってきた。さらに、円滑に連携を行うため、市内の在宅ケア関係者から意見を集めて、在宅療養での多職種連携のエチケット集づくりを行うこととした。

【実践内容】平成 26 年 9 月に市内の在宅ケア関係者 175 名を集め、多職種合同研修会を行い、「多職種連携に必要なエチケットやルール」というテーマでグループ討論を行った。内容は模造紙に記録した。記録内容から、742 枚のカードを作成した。エチケットをまとめるためのボランティアを研修会参加者から募り、17 名がカードを「入退院などの移行時の連携」「在宅での多職種連携」「その他」のカードに分類した上で、KJ 法を行い、エチケットやルールを抽出した。

【実践効果】研修会の意見から 60 個のエチケットを抽出した。抽出されたエチケットは表現を統一し、お互いを中傷しない表現、各職種が意欲的に取り組むことができる表現に変更した。さらに、シナリオを用いて医療と介護の連携場面に当てはめ、エチケットの修正、追加、削除を行った。多職種合同研修会のアンケートでは、研修の内容に「とても満足」47%、「まあ満足」50%、「やや満足」1%であった。

【考察】連携のエチケットやルールを作る過程は、在宅ケア関係者の関心が高かった。また、エチケットやルールを決定する際に、多くの在宅ケア関係者から意見を集め、討論するプロセスを踏むことで、在宅ケア関係者の満足度を高め、前向きな姿勢を引き出せたと考えられた。各ステークホルダーが納得して連携を行うために有用なプロセスであると考えられた。

【結論】多くの在宅ケア関係者から意見を集め、多職種による討議で、地域の在宅療養に必要なエチケットやルールを作ることは、納得できる多職種連携の仕組みを作る上で有用である。